

下関西高校・宇部高校に
平成29年4月から

探究科

が開設されます

新たな学びが始まります

《学科の改編》

- 「探究科」定員80名 ぐくり募集 [学年240人の定員は変わりません]
(2年次から「人文社会科学科」と「自然科学科」の2学科に分かれます)
- 「理数科」は募集停止

【探究科とは】

知識・技能の確実な習得に加え、発展的な教科学習や課題解決を図る学習に取り組むことにより、思考力・判断力・表現力を高めることを重視する学科です。

《探究科のコンセプト》

新しい時代に求められる探究力の育成

人文・社会科学と自然科学に関する分野において、自ら課題を発見し、その解決をめざして他者と協働しながら、学習成果等を様々な形で表現していく学習を行うことにより、探究力を育む。

【探究力とは】

自ら課題を発見し、他者と協働しながら、主体的に課題解決を図ろうとする力

高等教育での学習の基盤となる学力の育成

質の高い深い学びを通し、知識・技能の真の理解、深い理解を図るとともに、専門的な研究活動や教科の発展的な学習を推進することにより、思考力や判断力、表現力などを高め、高等教育における高度でより能動的な学修につながる学力を育む。

➡ **参考** 高大接続システム改革会議「最終報告」

高大接続改革（「高等学校教育」、「大学入学者選抜」、「大学教育」の一体的改革）

《教育の特色》

- 探究的な活動を進める科目の設定により、探究力や情報活用能力等を育成
- 各科目において探究的な活動を取り入れ、より深い学び、発展的な学習を展開
- 理数・英語においては専門科目を開設し、より高度な学習を展開
- ゼミ形式の授業や自ら課題を設定し研究する学習（課題研究）、フィールドワーク等の体験的な活動、大学との連携など、多様な学習形態を導入

高大接続システム改革会議「最終報告」

(H28. 3. 31に公表されたものから抜粋)

高大接続改革(「高等学校教育」、「大学入学選抜」、「大学教育」の一体的改革)の概要

「最終報告」における「学力の3要素」(高大接続改革答申(H26. 12. 22)の定義と共通)

- (1) 十分な知識・技能
- (2) それらを基盤にして答えが一つに定まらない問題に自ら解を見いだしていく思考力・判断力・表現力等の能力
- (3) これらの基になる主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

高等学校教育改革

⇒ 「学力の3要素」の確実な育成

◎ 学習指導要領の抜本的な見直し

- 育成すべき資質・能力を踏まえた教科・科目等の見直し
(「歴史総合(仮称)」、「数理探究(仮称)」、情報活用能力を育成する新科目など)
- カリキュラム・マネジメントの普及・促進

◎ 学習・指導方法の改善と教員の指導力の向上

- アクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善
- 教員の養成・採用・研修の見直し

◎ 多面的な評価の推進

- 学習評価の改善
- 多様な学習成果を測定するツールの充実
 - 「高等学校基礎学力テスト(仮称)」の導入(平成31~34年度:試行実施、平成35年度~:新学習指導要領に対応)
 - 農業・工業・商業などの検定試験や英語などの民間検定試験の利活用の促進

大学入学選抜改革

⇒ 「学力の3要素」の多面的・総合的評価

◎ 「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」の導入(平成32年度~:実施、平成36年度~:新学習指導要領に対応)

- 思考力・判断力・表現力の一層の重視
 - 「最終報告」の後、文部科学省において、関係団体等の参画を得て、実証的・専門的に検討し、新テストの実施方針(平成29年度初頭に発表予定)に反映する。

◎ 個別入学選抜の改革

- 明確な「入学受入れの方針」に基づき、「学力の3要素」を多面的・総合的に評価する選抜へ改善
 - ・ 新たな選抜実施ルール of 構築
 - ・ 「調査書」の改善や「学修計画書」等の充実
 - 「最終報告」の後、「大学入学選抜方法の改善に関する協議」の場で具体的な在り方を検討する。(平成32年度に実施される選抜から適用)

大学教育改革

⇒ 「学力の3要素」の更なる伸長

◎ 三つの方針(入学受入れ、教育課程編成・実施、卒業認定・学位授与)に基づく大学教育の質的転換

- ・ アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシー

◎ 認証評価制度の改革

- ・ 高大接続改革の趣旨を踏まえた評価項目・方法の改善

新テスト(高等学校基礎学力テスト(仮称)、大学入学希望者学力評価テスト(仮称))の制度設計のポイント

1 高等学校基礎学力テスト(仮称)

| | |
|--------------|---|
| 対象者 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 学校単位で受検することを基本。 ○ 希望する個人の受検も可能。既卒者等も受検可能。 |
| 対象教科・科目 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 平成31～34年度の「試行実施期」は、国語、数学、英語で実施。 (一部の教科・科目のみを選択した受検も可能) ※ 原則として、必修科目である「国語総合」、「数学Ⅰ」、「コミュニケーション英語Ⅰ」を上限とし、出題範囲の中に義務教育段階の内容も含める。 ※ 英語については、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」の四技能を測ることができる問題構成とすることを前提に、「話すこと」、「書くこと」の具体的な実施方法等については、更に検討。 ○ 平成35年度以降は、新学習指導要領における必修科目を踏まえた教科・科目の構成とする。 |
| 問題の内容 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 「学力の3要素」のうち、基礎的な「知識・技能」を問う問題を中心としつつ、「思考力・判断力・表現力」を問う問題をバランスよく出題。 ○ 結果から、平均的な学力層や学力面で課題のある層における基礎学力面の定着度合いをきめ細かく把握することができるように出題。 |
| 出題・解答・成績提供方式 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 「選択式」や「記述式」など多様な解答方式を導入。 ○ CBTの導入→学校内に配備されているコンピュータを活用する方式(インハウス方式)をベースに検討。紙によるテスト実施も念頭に置きつつ検討。 ○ IRTの導入→指導の工夫・充実のために問題等の公表が期待されることも踏まえつつ、更に詳細に検討。 ○ 本人の基礎学力の定着度合いを段階表示で提供。(学校単位で受検する場合は、当該学校に対して各生徒の結果を提供するとともに、都道府県に対して管内の各学校の結果を提供。) ※ 分野別の結果など、指導の工夫・充実に資する情報も提供。各学校や生徒等の順位は示さない。 |
| 実施回数・時期・場所 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 学年や時期、教科・科目等に関し、学校又は設置者において適切に判断できる仕組みとする。 ○ 1科目当たりのテスト時間は50～60分程度とする。 ○ 学校単位で受検する場合には、原則、当該学校で実施。 |
| 受検料 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 1回当たりの受検料が数千円程度となるよう検討。(低所得者世帯への支援策等を検討。) |
| 結果活用の在り方 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 平成31～34年度の「試行実施期」においては、大学入学者選抜や就職等には用いず、本来の目的である学習の改善等に用いながら、その定着を図る。 ○ 平成35年度以降の大学入学者選抜や進学・就職等への活用方策については、更に検討。 |

2 大学入学希望者学力評価テスト(仮称)

| | |
|-----------|---|
| 対象者 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 大学入学希望者 |
| 対象教科・科目 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 現行学習指導要領下における基本的枠組み(平成32～35年度) <ul style="list-style-type: none"> ・ 次期学習指導要領改訂の議論の方向性を勘案するとともに、大学教育を受けるために必要な諸能力をより適切に評価。 ・ 試験の科目数については、できるだけ簡素化。 ○ 次期学習指導要領下における基本的枠組み(平成36年度～) <ul style="list-style-type: none"> ・ 次期学習指導要領の趣旨を十分に踏まえ、特に思考力・判断力・表現力を構成する諸能力をより適切に評価。 ・ 次期学習指導要領での導入が検討されている「数理探究(仮称)」や、教科「情報」についても出題。 |
| 問題の内容 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 知識・技能を十分有しているかの評価も行いつつ、「思考力・判断力・表現力」を中心に評価。 |
| マークシート式問題 | <ul style="list-style-type: none"> ○ より思考力・判断力・表現力を重視した作問へ改善。 (例) 正解が一つに限られない問題、選択式でなく正解を数値や記号等を直接マークさせる問題など ○ 評価結果は、現在よりも多くの情報(例えば、素点だけでなく、各科目の領域ごと、問いごとの解答状況も合わせて提供するなど)を各大学に提供。 |
| 記述式問題 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 国立大学の二次試験のような解答の自由度の高い記述式ではなく、設問で一定の条件を設定し、それを踏まえて結論や結論に至るプロセス等を解答させる「条件付記述式」を中心に作問。対象教科は、当面、国語、数学。 ※ 平成32～35年度：短文記述式、平成36年度～：より文字数の多い問題を導入。 ○ 評価結果は段階別表示。 ○ 実施時期については、高等学校教育への影響や大学入学者選抜の合否判定のタイミング等に関する関係者の意見も聞きながら、マークシート式問題と同日に実施する案、マークシート式問題と別の日に実施する案のそれぞれについて、十分に検討。 |
| 英語の多技能の評価 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 四技能の評価を推進。「話すこと」については、環境整備や採点等の観点から、平成32年度からの実施可能性について十分に検討。 |
| 複数回実施 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 日程上の問題、CBTの導入や等化等による資格試験的な取扱いの可能性などを中心として、引き続き検討。 |



もっと詳しく…

高大接続システム改革会議

検索

